

第2章 まちづくりの課題

重点課題1 地域交流の促進

中京区は、「自分たちのまちは自分たちでつくる」という住民自治の伝統を受け継いでおり、学区を中心とした地域活動が活発なまちです。

しかし、近年は少子化や長寿化、核家族化といった家族形態の変化等を背景に、地域のつながりの希薄化や福祉的課題の複雑化・複合化、子育て家庭の孤立化等が大きな課題となっています。

さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大により、

住民同士の日常の交流やこれまで取り組んできた地域活動が大きく制限を受けたことで、これらの課題はより深刻化、顕在化しました。

このため、「新しい生活スタイル」にもしっかりと対応しながら、地域コミュニティの活性化や地域共生社会の実現、教育・子育ての支援など、地域交流の促進に取り組んでいくことが急務となっています。

地域のつながりの希薄化

中京区では、長年にわたり、学区を基礎単位とする自治活動が盛んに行われており、高い住民自治の気風をもっています。一方で、小学校の統合や地域課題の広域化等により、学区の垣根を越えた活動の必要性も増しています。また、マンション等の集合住宅や単身者の増加により、以前に比べて、地域コミュニティ活動への参加が減少傾向にあり、地域でのつながりの希薄化が進んでいます。

町内会の加入率が減っており、役員のなり手も少なくなっている

NPOや学生等の力も借り、マンションに住んでいるひととの交流も進めたい

町内会側も加入してもらおうための工夫が必要

コロナ禍で集まらず、行事が中止になった。ITやオンライン会議導入等の工夫が必要

子どもの頃から地域活動への参加を促し、学区運動会や地蔵盆等の地域行事を活性化したい

ICT(情報通信技術)を活用すれば、若い世代も含め、もっと活動に参加しやすくなるのではないかな

地域で気軽にあい
さつができる関係
をつくりたい



困り事があっても、ど
うしたらいいかわから
ないひともある。とく
に認知症やひきこもり
等の家族をもつ家庭は
相談しづらい



福祉的課題の 複合化・深刻化

少子化や長寿化、ライフスタイルの変化により、単
身世帯、そのなかでもとくにひとり暮らしの高齢者は
増加傾向にあります。

さらに、介護等の従来からの福祉的課題に加え、育
児を同時に抱えている世帯（ダブルケア）や高齢の親と
ひきこもりの子が同居している世帯（8050問題※）など、
複雑かつ複合的な問題を抱えている世帯の増加が懸念
されます。

また、生活するうえで何らかの負担や悩みを抱えて
いても、適切な支援につながらず、地域で孤立し、課題
を深刻化してしまう世帯の増加も課題となっています。

※「8050問題」80代の親とひきこもり状態の50代の子が
同居する世帯の孤立化・困窮化に伴うさまざまな問題

感染症患者に対す
る中傷等の差別は
許されない



コロナ禍で外出でき
る場が減っている。
とくに高齢者には運
動や交流できる機会
や場が必要



IT化は便利な反
面、とくに高齢者
など、取り残され
るひとが出るた
め、支援するひ
とが必要



区民から寄せられた
意見は吹き出しで
紹介しておるぞ！



見守り活動をする
ひとが足りていな
い。支援者同士の
連携や定年退職後
の男性の活躍に期
待したい



地域で子どもを見かけても声をかけづらい。子どもを地域ぐるみで育てる雰囲気をつくっていきたい



児童虐待等の不幸な出来事が起きないように地域で支え合いたい



教育・子育てに対する意識の变革

子どもたちは、未来のまちづくりを担う主役であり、地域にとってかけがえのない「宝」です。

しかしながら、子育て環境をめぐるのは、核家族化の進行や地域コミュニティの希薄化等による子育て家庭の孤立化や、共働き世帯の増加による仕事と子育ての両立の難しさなど、さまざまな課題が存在します。

また、とくに新型コロナウイルス感染症の拡大に際しては、地域コミュニティと子育て家庭、子ども同士が直接的にふれあい、交流する機会が減少し、学びの機会が制約され、子育て家庭のさらなる孤立化を招きました。

そのため、こうした課題を子育て家庭だけの問題ととらえるのではなく、地域社会や事業者、行政等のさまざまな関係者が連携して、子育てや教育に対する地域の意識を変えていくことが求められています。

子どもの急な病気など、緊急時に頼れるひとがいない。子育てについて、気軽に相談できる場がほしい



学区で実施されている「きつずばあく」で友達ができた。子ども同士や親同士がつながれる場がもっと増えてほしい



コロナ禍で子どもと一緒にいける場所が減った。まちなかにもオープンテラス等が増えれば郊外まで行かなくても済む



マスクで表情が見えないだけでも影響が心配されるほど、子どもは見えて学んでいる。ひとりひとりが子どもを育てているという意識をもつべき



重点課題2 文化とにぎわいの創出

中京区は、伝統行事やくらしの文化、歴史的な景観等の文化資源の宝庫であるとともに、事業所が集積する経済活動の中心地として多様な主体が活躍するにぎわいのあるまちです。

しかし、近年は少子化や長寿化、価値観やライフスタイルの多様化等を背景に、伝統的なくらしの文化や景観の継承、日常生活を支える身近な商店街の活性化等が課題となっています。さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大が、接触機会の回避、消費

の低迷等をもたらしたことで、これらの課題はより深刻化しています。また、情報化の進展等により、時代の変化のスピードも早まっています。

このため、歴史文化をしっかりと守り未来に継承するとともに、多様な主体と連携し、さらには、IoTやAI等の最新技術や従来にはない課題解決の手法も取り入れながら、まちの魅力を高めていく必要があります。

地域文化の継承の危機

中京区は、豊富な文化資源を有するまちです。地域の歴史や文化は、長い年月をかけて日々のくらしや生業のなかで区民ひとりひとりが愛着をもち、次の世代へと受け継がれてきました。

しかし、少子化による人口減少や核家族化の進行に伴い、区民の日々のくらしのなかで自然と受け継がれてきた文化の継承が危ぶまれています。さらには、地域のつながりが希薄化するなか、これまで地域で脈々と受け継がれてきた地域の祭りや行事も、次の世代に継承していくことが困難になってきています。

地藏盆や夏祭り等の地域の行事を次の世代につないでいくためにも、担い手を確保していきたい

町内会の行事に参加したいが、住んでいるマンションが町内会に入っていない

コロナ禍で祭りができなかった。元々負担が大きかったので今後も復活できないかもしれない

祭りや行事も変えられる部分は見直すべき

きもの文化や伝統的なくらしの文化を若いひとに受け継いでいきたい

町家等の伝統的な景観が消えつつある。伝統産業品を使う機会もあまりない

観光客が増えて買物もゆっくりできなかったが、コロナ禍で人通りが激減し寂しい気がする



外部資本の店が増えた一方で、地元のひとが営む店が減っている



商店街の頑張りを応援したい。学生の意見を取り込むなど、新しいことにも挑戦してほしい

にぎわいの継続に向けた 社会変化への対応

中京区は、古くからさまざまなひとびとが集うにぎわいのまちです。商業活動も活発で、区内の商店街は日用品等を提供する区民の日々の暮らしを支える場であるとともに、「京もの」等の魅力的な商品を求め国内外から訪れる来訪者の声にも応え続けてきました。

しかし、近年は、観光客のマナー問題や商店の後継者不足、空き店舗の増加など、地域によってさまざまな課題を抱えており、さらに、ライフスタイルの多様化による消費者ニーズの変化、インターネット取引やキャッシュレス決済の普及等の外的環境の変化にも対応することが求められています。

一方、日常生活を支える身近な商店街という存在は、新型コロナウイルス感染症の拡大等をきっかけに、顔の見える安心感と地域コミュニティの場としての重要性が再認識されるようになっています。

後継者のいない老舗のお店がひっそりと消えていくのは残念。近所の商店街でも空き店舗が増えている



コロナ禍で地域の絆や商店街の重要性を再認識した。なるべく地元のお店で買物をして地域を元気づけたい



社会課題解決に向けた 企業活動との連携

中京区では、地域に根差して活動する企業が祭りや行事等の地域のまちづくりの担い手となってきました。さらに近年はビジネスとして社会課題の解決に取り組む「社会的企業」が活躍するなど、多様な企業が集積し地域社会を支えています。

ソーシャルビジネスの考え方は、今後の地域と企業を考えるうえでも重要だ



コワーキングスペースを増やすなど、起業しやすい土壌を整備していくことが大事



地域課題は多岐にわたっており、地域住民だけでは解決が困難な問題が増えつつある



コロナ禍でオンラインが一気に普及した。地域も対応していけば、さまざまな団体や学生の協力が得やすくなる



産学公との連携と市民協働の拡充

まちづくり活動が活発な中京区では、地域の方々と連携して多くの学生がまちづくりに参画しています。授業やゼミ活動に限らず、地域に息づく豊富な歴史文化資源、課題が山積する環境や防災活動への関心の高まりなど、学生が地域とかかわるきっかけは無数にあります。学生にとって、地域の課題は生きた教材であり、地域団体や商店街等のさまざまな主体と出会い、解決策をともに考える実践的な学びの場となっています。そして、地域団体や商店街も学生を受け入れることで、大学の知見や若い柔軟な発想をまちづくりに取り込んできました。

地域課題が多様化、複雑化している現代においては、地域団体だけでまちづくりを担っていくことはますます難しくなってきており、地域の活力を維持・発展させていくためには、これまで以上に産学公との連携を深めるとともに、多くの市民との協働を深めていくことが求められています。

地域課題が複雑化、広域化するなど、まちづくりを取り巻く状況が大きく変化していることから地域の課題解決に向け、こうした企業との連携が不可欠となっています。

また、区内には、IoTやAI、情報通信分野のスタートアップも立地し、新たな生活スタイルの促進に資するアイデアや技術を有する企業も存在することから、こうした企業との連携も求められています。

起業等に挑戦するひとが増えないとまちの活力がなくなる。ポストコロナも意識した新しいビジネスがどんどん生まれてほしい



NPO等の市民活動と地元の自治活動との接点が乏しい。地域課題を解決するには、大学や企業も含めた多くの団体と協力関係をつくっていくことが重要



学生のまちづくりへの参加に当たっては、地域に学生の意見をじっくり聞いてほしい



地域活動に参加する学生に単位を与えるしくみがあるとよい

地域企業の存在や魅力が住民や学生に十分伝わっていない。地元の企業には慢性的に人手不足のところもある



地域と企業が出会う機会をもっと増やしていった方がいい

重点課題3 持続可能なくらしの実践

中京区には、幾度となく大きな戦乱や災害、疫病など、まちの持続や発展を脅かす危機に直面しながらも、地域の結束と知恵により見事に立ち直り、乗り越えてきた歴史が息づいています。

しかし、近年、地球温暖化による異常気象や自然災害が頻発しています。さらに、世界的な感染症の拡大が、まちの持続や発展を脅かす新たな脅威となっ

ています。また一方、身近に起こりうる交通事故や犯罪、火災等をできる限りゼロに近づけることも必要です。

このため、持続可能なくらしをキーワードに、地域防災力の向上や危機管理の徹底、歩いて楽しいまちなかの創出や環境に配慮したライフスタイルの確立等に取り組んでいくことが求められています。

近所に空き家ができ
た。放置空き家にな
らないよう地域ぐる
みで対応していかな
いといけない



住んでいるマンション
は町内会に加入してい
ないので、災害時の対
応がよくわからない



迫りくる災害や 感染症への備え

中京区は、警察や消防、事業者や学校等の関係機関の結びつきも強く、子どもたちの登下校時の見守り活動や学区ごとの充実した防災訓練など、地域を挙げた防犯や防災活動が活発なまちです。

しかし、地球温暖化による自然災害の頻発や世界的な感染症の拡大等に対応するためには、より一層の防災力の向上や危機管理の徹底が求められています。また、災害時の二次被害の防止や防犯上の課題にもつながる放置空き家の老朽化等の問題に対応していくには、さらなる関係機関の連携が必要です。

いざという時に地域
住民が一丸となって
行動できるよう、日
頃からお付き合いを
大事にしたい



災害時は、皆が当
事者意識をもち、
自分のできること
は、自分でやらな
いといけない



子どもたちにも日頃
から地域で役割を与
え、育てていくこと
が、災害時に自分た
ちに何ができるのか
という視点をもつこ
とにつながる



備蓄物の保管場所
確保を含め、感染
症に対応した避難
所運営を確立して
いくことが重要



コロナ禍で自転車
に乗るひと増え
ており、自転車の
ルールやマナー啓
発が重要



通過するクルマや
路上駐車、駐輪を
減らし、昔のよう
に子どもが道路で
遊べるようになってほしい



通りの復権と 歩いて楽しい まちなかの創出

中京区は、徒歩や自転車での移動も容易な歩いて楽しめるまちです。また、くらしの文化が根付いており、古くから「通り」を舞台に地域の祭りや行事が行われてきました。

しかし、クルマ優先社会のなか、近年では宅配便の増加等に伴う路上駐車や通過交通の多さ、自転車マナー違反等により、「通り」を取り巻く環境は悪化しており、ひとびとが集う場としての役割が失われつつあり、「通りの復権★」が求められています。

町並みや景観を守るには、市民の理解や所有者への支援が必要



通りの復権

中京区では、区民のくらしや生業、催事や伝統が古くから「通り」で営まれてきましたが、現在では「通り」が単なる通過空間になってしまっています。そのため、クルマ中心のライフスタイルからの転換を図り、安心安全に往来できる、区民の日々のくらしや生業の空間としての魅力ある「通り」の復権をめざした取組を進めています。

自転車講習は、子どもたちだけでなく、大人、とくに高齢者にも必要



重要な用語は
「注目用語」として
解説するぞ！



ポストコロナの観光は、マナー問題など、以前起こった問題を繰り返さないことが重要



観光客のボイ捨てや騒音に困っている。民泊等の宿泊事業者は、地域の事情を理解し、宿泊客に徹底してほしい

観光客が増え過ぎたことでゆっくり史跡やまち歩きを楽しめないなど、「京都らしさ」が失われつつある

観光客の増加がホテルの急増を招き、地価の高騰につながっている

観光客が増えても、その恩恵が感じられない

市民生活を最重視した持続可能な観光の模索

中京区には、悠久の歴史に培われた豊富な文化資源があり、国内外から訪れる多くの来訪者を惹きつけてきました。

一方、新型コロナウイルス感染症の拡大以前は、世界各地から来訪者が急激に増えるなか、京都の文化や習慣に対する理解が不十分なまま来訪されるひとも増え、マナー問題をはじめとしたトラブルが顕在化していました。

今後、新型コロナウイルス感染症の終息状況に応じて再び来訪者が増えることが予想されますが、従来のような来訪者の増加に起因するさまざまな問題を再発させない取組が求められています。

観光客には上辺だけでなく、京都の本質に触れてほしい



コロナ禍で観光客が減少した今こそ、魅力ある京都のまちのあり方を考えるべき



コロナ禍でプラスチックごみが増えた。使い捨て社会からの脱却を意識しないといけない

クルマに依存しないまちづくりなど、エネルギー消費にも関心をもってほしい



町内でも周知しているが、ごみの分別やごみ出しのルールを守らないひとがいる。もっと啓発が必要



環境に配慮したライフスタイルの確立

中京区は、古くから京都の産業、経済活動の中心地として発展してきました。

一方、現在は、地球規模で温暖化が急速に進むなか、異常気

便利すぎる暮らしを見つめ直す時期にきている。昔からの生活の知恵を現代に生かしていくことも必要だ





京都市の厳しい財政状況

現在、京都市の財政は危機的な状況にあり、財政の改革が喫緊の課題となっています。とりわけ、直近の令和3(2021)年度から令和5(2023)年度までの3年間は、現下の状況を克服し、持続可能な行財政運営に道筋をつけるため、とくに重要な「集中改革期間」として位置付け、早期に財政効果の発現が見込める歳出の見直しや受益者負担の適正化等の改革に集中的に取り組んでいくこととしています。

❖ 財政が厳しいなかでも充実した行政サービスを維持

市民ひとり当たりの市税収入が他都市より少ないなか、高い水準の福祉、医療、教育、子育て支援等を実施。その水準を維持するため、職員数の削減や事業の見直し等の行財政改革を行うとともに、担税力の強化といった成長戦略の推進に取り組んできました。しかし、国からの地方交付税が大幅に削減され、収入が伸び悩むなか、高齢化による社会福祉関連経費等の支出が増加。行財政改革の取組だけでは必要な財源を賄いきれなかったことから、将来の借金返済の積立金(公債償還基金)等を取り崩し、将来世代へ負担を先送りしている状態です。

具体的成果 ● 保育所等の待機児童が8年連続ゼロ

● 大雨への浸水対策済み面積割合が全国トップ水準(市91%、全国60%) など

❖ 今後の収支見通しと財政再生団体になる危機

新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、市税収入の回復が見込めないなか、社会福祉関連経費が増加する見込みです。歳入増加・歳出削減の取組を反映させない場合、毎年度の収支不足額が500~600億円まで拡大し、財政再生団体になると、急激かつ大幅な市民サービスの低下が避けられません。

影響(例示) ● 国民健康保険料約3割値上げ ● 保育料約4割値上げ など

❖ 魅力あふれる京都を皆さんとともに未来へ!

コロナ禍と財政危機という2つの大きな困難に直面していますが、わたしたちは、京都のまちをより素晴らしいものとして次の世代につないでいかねばなりません。このため、「行財政改革計画」(令和3年夏頃策定予定)に基づき、「挑戦」と「改革」を断行し、市民の皆さんとともに、このまちの力を信じ、明るい今と未来を切り拓いてまいります。

中京区においても、これまで以上に徹底した「選択と集中」、「区民の皆さんとの共汗」及び「施策の融合」を図ることにより、「ふれあいとにぎわいのまち」の創造に取り組んでいきます。

象等のさまざまな影響が顕在化しつつあります。都市化が進展した中京区でも便利な生活と引き換えに、多くの資源を使う生活様式が定着し、結果として、エネルギーの大量消費やごみを大量に排出すること等につながっています。

環境負荷の低減による持続可能なライフスタイルの確立が求められています。

温暖化の進展が自然災害の激甚化につながっている。ひとりひとりがもっと危機感をもつてエコな暮らしを实践する必要がある

